

風の記念日—《芽出るカー》で七色の風に乗ろう

2010年7月18日 北浦和公園 疎林広場

1000本の美しい風車をみんなで作って新しい風の風を起こそう。SMFの活動の原点となった《風車プロジェクト》は2008年7月、埼玉県立近代美術館のある北浦和公園からはじまりました。ひとつまたひとつと多くの方々の協力で作られた色とりどりの美しい風車が、風の舞いを踊る創作ダンスチームとともに、川越、入間、鳩山、川口と各地を巡り、秋には1600本もの色とりどりの風車が北浦和公園に帰還し、見事な風の華を咲かせました。2009年秋には何と4000本もの風車が噴水内を含めて北浦和公園に立ち並び、夢のような情景を出現させました。その旅の途中では、たくさんの笑顔と素敵な仲間たちとの出会いがありました。これまでに風車づくりや設営にご協力いただいた方々は延べ人数で、ゆうに1000人を超えています。

SMFの2010年度事業《交差する風・織りなす場》の開幕にあたり、この「アート」の風をいっそうの拡がりを願って《風の記念日》を設け、風車プロジェクトを監修していただいた根岸和弘さんを講師に迎えて、今年度のオープニング事業として《芽出るカー》で七色の風に乗ろうを開催しました。今年度の事業告知とSMFの活動紹介も兼ねて実施したプログラムです。

当日は夏のきらめく光と心地よい風に恵まれ、午前中から20名を超える方々が準備に



集まりました。協力の奥野由利さん、南照子さんの呼びかけで、「CAF.N(コンテンポラリー・アート・フェスティバル・ネビュラ)」のアーティストを中心に、風車プロジェクトを支え一緒に実現して下さった主力の仲間たちが久しぶりに顔をそろえました。作業を進めながら会話が弾みます。

根岸さんの新作《芽出るカー》(観光地の顔出しパネル風の参加型作品)を組み立てて芝生に設営、並行して木陰に風車づくりの野外工房が設けられ、風車とダンスの旅の写真などがパネル展示されました。続いて《芽出るカー》の前方に用意した数百本のカラフルな風車を植え、七色の風の道を作ります。記念撮影用のカメラと写真出力用のプリンターをセットして準備完了です。ちなみに



《芽出るカー》のネーミングは、作者によれば、風車が地面からニョキッと「芽」を出して花を咲かせるイメージと「風を愛でる」を掛けたもので、過去を振り返るだけでなく「芽出るか?」と投げかけながら、前に向かおうという気持ちも込めています、ということです。

《芽出るカー》や立ち並んだ七色の風車を見つけて子どもたちが駆け寄ってきます。風車づくりの工房も定刻より早くスタートしました。あら不思議! 平らなカットシートをクルリクルリと何度か折り返すだけで4枚の矢羽根が立ち上がり、美しい風車が生まれてきます。大人たちのアシストでできあがった風車を大事そうに抱え、息を吹きかける子どもたち。風車を風の道に植えたら、《芽出るカー》に乗って「顔を出して」の記念撮影です。好天にも恵まれ、大人も子どもたちと一緒に童心にかえって楽しんだ一日でした。打ち上げのビールが美味しかったのはもちろんです。さて次の記念日、みなさん何をして楽しみましょうか? 中村誠(SMF事務局)

講師紹介: 根岸和弘

シエル美術賞展、ジャパンアートフェスティバル、現代日本美術展、モダンアート協会展、CAF展などで活躍。2006年ニュージーランドでの「1000 windmills garden」から、システムティックに創られた美しく耐久性のある風車を野外にインスタレーションするプロジェクトを展開。2008年「LINK! ミュージアムからアート」の風を!!、2009年「SMF アートのわっ!」では、メインプログラムとなる風車プロジェクトを監修、多くの方々の協力で、計7回の壮大なインスタレーションを実現させた。「水都大阪2009」では、中之島の剣先公園に華麗な風車の群舞を出現させた。

SMFとは?

SMF(Saitama Muse Forum)は、身近な場所でアートを楽しむ、支援し、再創造するプラットフォームづくりをめざすプロジェクトです。埼玉県立近代美術館をキーステーションとして、美術・音楽・ダンス・建築・文学など、さまざまな分野の意欲的な人々が集い活動しています。http://www.artplatform.jp

アートピクニック: 越谷再発見!

2010年7月24日

2010年7月24日、越谷市の魅力を見つめるイベント〈アートピクニック:越谷再発見! Re-discover KOSHIGAYA〉が開催されました。真夏の暑い日差しの中、参加して下さったみなさんとまち歩きなどをしながら、地域のおもしろさや魅力を一緒に考えました。

地域の魅力とひと口に言っても難しいのですが、私たちが越谷市でおこなっているまち全体を美術館に見立てる活動「まちアートプロジェクト(MAP)」のなかで、いちばんつよく感じているのは、まちで暮らす人自体の魅力でした。MAPでは、若いアーティストや大学生が約40店の店主の方々と本気で相談しながら作品を制作し、まちと関わりながら展覧会やシンポジウムを企画・実施しています。それは参加者自身が成長するようなプロジェクトでもあります。2006年からつながりはじめたその輪はだんだん大きくなり、ただ作品を制作することに意味があるのではなく、まちに関わる過程や人とのつながりが作品であるかのように広がっていきました。2008年には北越谷に「アートを通して人と人のコミュニケーションを生むアートスペース」をコンセプトとして、「KAPL」(コシガヤアートポイントラボ)が設立されました。

今回の〈アートピクニック〉ではまずKAPLにおいて、越谷市を撮影場所として大学生と商店主との温かい関わりや越谷市の現状を描いた浅沼奨監督の映画『鉄塔手繫日』(2009年制作)の上映会がおこなわれました。上映の後は、MAPの活動でお世話になり、今回の映画の撮影場所にもなった「もみの木」さんのケーキを食べながら、浅沼監督とのトークを楽しみました。「もみの木」さんでは定休日撮影したり、冷蔵庫の音が映像に入らないように撮影中は電源を切っていたりなど、さまざまな撮影の裏話を聞くことができました。またKAPLでは、越谷市の写真をネット公募で集めた「越谷写真1000景」の展示がおこなわれており、越谷への視点や撮影者の話などを聞きながら鑑賞会を実施しました。

KAPLでゆっくりしたあとは、いよいよ越谷探険! MAPでお世話になった商店をまわ

り、作品のリバイバルを鑑賞したり、店主さんたちから越谷についてや作品制作秘話などを語っていただいたりしました。MAP参加商店である「井上天ぶら店」さんでは、MAPメンバー大澤加寿彦さんと井上店長さんが一緒に制作したオリジナルソング「置きわすれた自分」を店先で歌わせていただきました。おかみさんからはブルーベリーの差し入れがあり、冷たいブルーベリーをつまみながらの路上ライブになりました。まち行く人たちにも聴いていただき、楽しい時間を過ごすことができました。次に訪れた「しまず青果店」さんでは、店長さんから越谷の移り変わりや、まち、若い人たちに対する思いなどの話をうかがいながら、こだわりのバナナをふるまっていたいただきました。お腹も本気モードになってきたところで、最後は「井上すし店」さんで乾杯! 参加者のみなさまとともにビールで炎天下に渴いたのどをうるおしながら、リーズナブルな値段で味わえるお寿司を堪能し、いつしか「アート&グルメツアー」となりました。

参加者の感想としては、「青果店の店主さん、天ぶら屋さんの駐車場でコンサート、美味しいお寿司で大満足です。長い期間にわたるMAPの取り組みのなかで、まちの人たちとのよい関係が生まれてきたことが分かりました」、「まちとの関わりがよく写り込んでいる映画だな、と思いました。冒頭のまちのシーンなど、ドキュメントシーンが秀逸でした」、「とにかく、商店街とのつながり、人とのつながりがとても良い形で出ているなと思いました。すごく仲良く見えてよかったです」、「とても楽しかったです! そして、おいしいツアーでした!」など、さまざまな意見をいただくことができました。

まちという大きなくくりで見るとその魅力を探るのは難しいけれど、まちを構成しているのは人。人が集まってまちになり、集まった人たちがまちを作っていく。人を見つめていくとまちが見えてくる—今回の企画を通じて、そのようなことを改めて感じる事ができました。あたりまえに生活していく場所だからこそ、新しい魅力を発信して、さらに自慢できる



ように努めていきたいと思っています。機会があれば、ぜひ気軽に越谷に遊びに来て下さい。お待ちしております!

鈴木真里子(SMF協力委員)

